

第 1 分科会報告

| | | | | | |
|-------|------------------------------------|----|----------------|-----|-----|
| テーマ | 大学、市民、NPOが学びあい、そして育つ | | | | |
| 企画・運営 | (特)ふじみの国際交流センター、埼玉県立大学、日本工業大学、立正大学 | | | | |
| 進行 | 萱場 一則 (埼玉県立大学) | 記録 | 鹿山 光恵 (埼玉県立大学) | 参加者 | 25名 |

【概要】

1 事例発表「NPOが大学に期待すること」

発表者：ふじみの国際交流センター 石井理事長

<Learning by Doing!> を合い言葉に、大学はIT、語学、福祉などに関する専門性をNPOに提供してもらいたい。また、学生はインターンシップの体験を今後に生かしてもらいたい。

(意見等)

- 調査・研究などの目的意識を持った学生のインターンシップ受入れは歓迎している。カリキュラム作成は大変であるが、学生への教育上のメリットも提供していけるようにしたい。(NPO関係者)
- インターンシップに参加するに当たり、学生側の現場体験に対する事前準備ができていないようだ。(NPO関係者)

2 事例発表「大学の教育・研究のフィールドとしての地域」

発表者：立正大学 矢澤教授 (社会福祉学部長)

立正大学では地域との関わりで、様々な試みが行われている。NPOに限らず様々な活動を行っている市民団体と交流することにより、学生が学ぶことは多くある。NPOは学生に即戦力を求めず、失敗するチャンスも与える学びの場を提供してもらいたい。

(意見等)

- 学内でボランティアセンターの運営に携わっている。外部への取材活動などを通じて学ぶことが非常に多い。継続的に取り組んでいきたいと思うとともに、この経験を後輩にも伝えていきたい。(学生)
- 学生とともにボランティアセンターの運営に携わっている。センターを中間的支援の場として充実させていきたい。最近では福祉関係だけではなく、環境関係など様々な分野からの要請がきている。(大学関係者)

3 事例発表「日本工業大学における地域とNPOとの交流」

発表者：日本工業大学 大木教授

大学近隣の小中学校などを対象に情報活用ボランティアを実施したり、地域のNPOからの要請により、業務用アプリケーションソフトの開発を行った。成果としては、学生がコミュニケーションの重要性を学んだことなどである。

現在、全国規模でインターンシップシステムを運営しているのはNGOである。学生がシステム開発を手がけることも可能である。

(意見等)

- 教員に勧められて行ったボランティア活動であっても、経験した学生の評判はよい。教員がプッシュすることも大切である。学生にとっては、コミュニケーション力を高める訓練の場となっている。(大学関係者)

4 事例発表「埼玉県立大学における連携と統合教育」

発表者：埼玉県立大学 萱場教授 (教育研修センター所長)

埼玉県立大学では連携と統合の概念のもとに、病院・施設等での専門職連携実習を実施するために、現在、実習先の確保など準備段階である。実習先として、今後NPOも視野に入れていきたい。

5 まとめ

立場によって様々な意見があり、お互いに尊重して連携を進めていきたい。本日の分科会の場で、今後の可能性の多様化を示せたのは大きな収穫であると思う。